

本イベントへの参加者からの主なご意見・ご提案

1 イベントについて

- ・自分の住むまち仙台を見直す機会になった。
- ・多岐にわたる人々の意見を聞く良い機会。仙台市の市民の意見を反映させようとする取り組みは素晴らしいと思う。
- ・ファシリテーターや専門家の方の意見や考え、また仙台市の取り組みが見え、とても興味深く楽しい企画だった。参加メンバーとのトークももちろんだが、市政に関与できたという満足と今後自らも取り組むべきことを考えられる良いフォーラムだった。
- ・大好きな仙台がますます魅力的なまちへと発展するよう、これからは積極的に色々なことに参加して、発信していきたい。
- ・今後もこのようなフォーラムを続けてほしい。

2 今後の開催に向けた提案

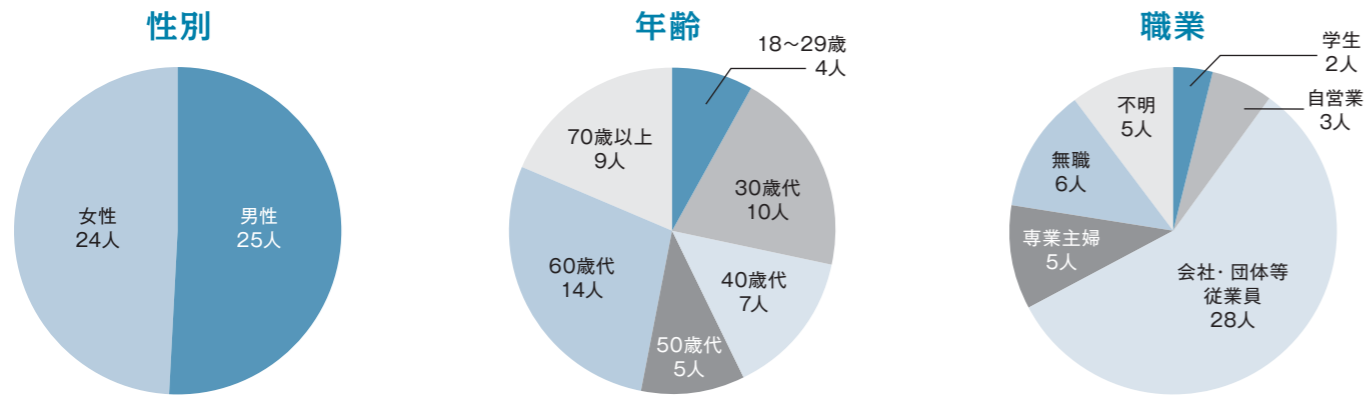
- ・次回は医療福祉を取り上げてほしい。
- ・論点がいろいろあり話し合いは興味深かったがまとめるのが難しかった。事前に論点を知っておくとよりスムーズな話し合いができたのでは。
- ・人数が増えればまた違う意見も出たのでは。今回の話し合いを1度だけにせず何回か行えばもっと具体的な意見も出てくるのでは。
- ・自由意見を交わす時間ももっとあるとよい。
- ・本日の提案・意見が仙台市の政策にどう反映されるのかPRすべき。
- ・声が小さく聞き取れない場合や雑音で内容が確認できないことがあった。

仙台市から

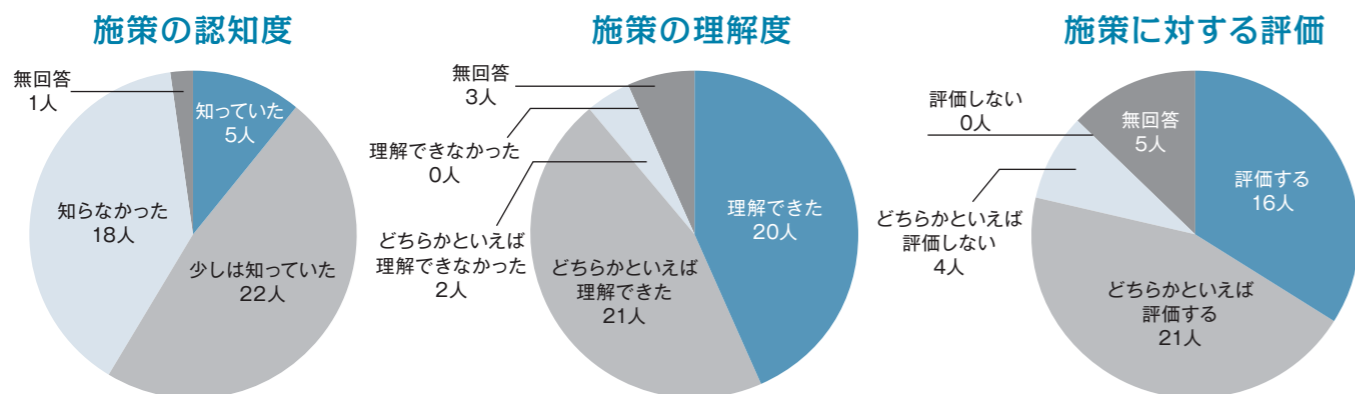
今回はテーマ数を増やして8つのテーブルで話し合いを進めましたが、いずれのテーマにおいても「仙台をより魅力のあるまちにしたい」「仙台をより住みやすいまちにしたい」という参加者の皆様からの熱い思いが伝わってくるイベントとなりました。また、私ども市職員にとっては、実に様々なご意見があることを改めて実感する機会になりましたし、市の施策のPR不足を含め、まだまだ施策を推進していく必要があると強く感じました。

今回のフォーラムでいただいたアイデアやご意見については市役所内で共有し、今後の取り組みに対して具体的にどのように活かしていくか、1つでも多く実現できるよう検討してまいります。

参加された方々 (参加者合計：49人/アンケート回答者 46人)



施策アンケートの集約結果 (イベント終了後に施策の評価をしていただきました。)



報告書

市民まちづくりフォーラム

— 知ろう、語ろう、仙台の重要プロジェクト 2015 —



日にち 平成27年10月25日(日)
時間 13:00~16:50
場所 TKPガーデンシティ仙台(アエル30階)ホールD
 仙台市青葉区中央1-3-1アエル30階

主催：仙台市
 仙台市まちづくり政策局政策企画部政策企画課
 〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1
 TEL.022-214-1268 FAX.022-214-8037 E-mail. mac001620@city.sendai.jp



市民まちづくりフォーラムとは

仙台市は、平成23年3月に21世紀半ばに向けて目指すべき都市の姿を示す「基本構想」と、これを実現するための10ヵ年計画である「基本計画」を策定し、また、同年11月には、震災からの復興に向け、基本計画を補完するものとして「震災復興計画」を策定しました。

これらの計画に基づき、平成24年3月には、平成24年度から平成27年度までの4ヵ年の具体的な取り組みと重点的に取り組むべき施策を定めた「実施計画」を策定しました。「実施計画」に定めた取り組みについては、ただ単に計画を作成して終わりではなく、重要な施策については、市民の方々の協働により評価・点検を行うこととしています。

また、今年度は、「基本計画」が策定後5年の節目の年を迎えることや、震災復興計画期間が終了することなどを踏まえ、今後5年間の重点的に取り組むべき政策の方針を取りまとめた「仙台市政策重点化方針2020」や、「まち・ひと・しごと創生法」に基づき、人口減少社会、東京圏への一極集中などの課題に対応するための「(仮称)仙台市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定を進めています。さらに、平成28年度

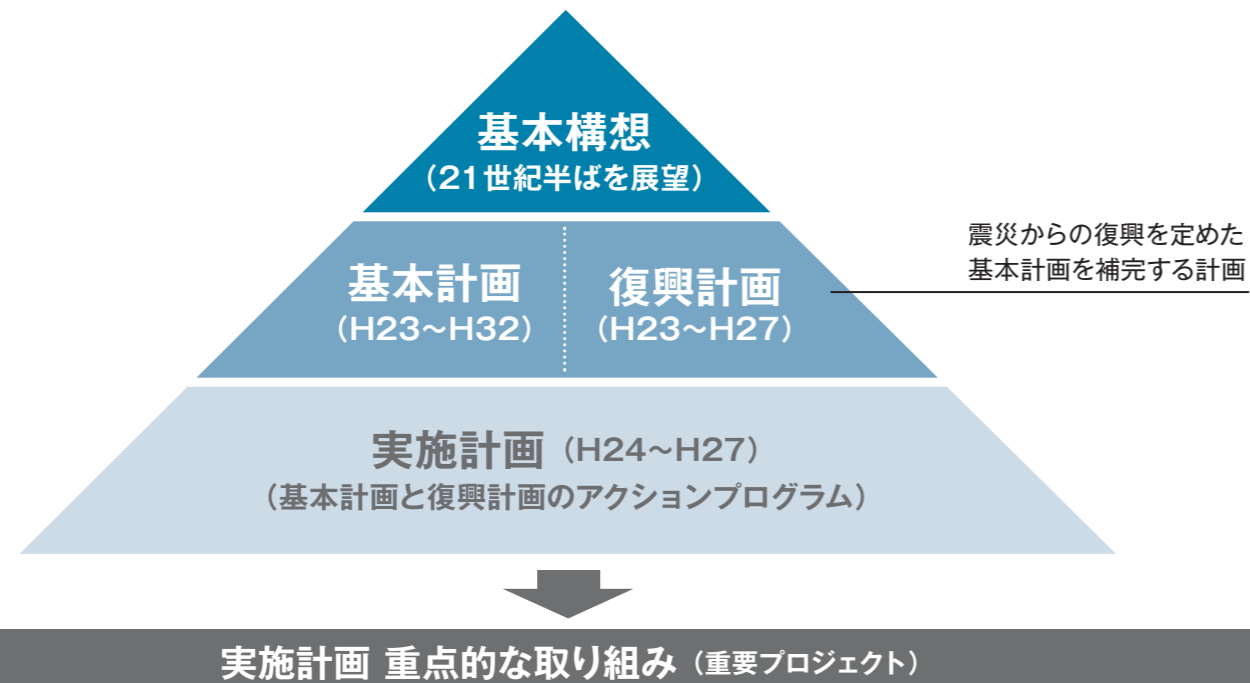
から平成30年度までの3ヵ年を計画期間とした新しい「実施計画」の策定も進めています。

このことを踏まえ、市民の皆様へ、現在市が取り組んでいる、または検討している重要プロジェクトの現状を評価していただき、より良い施策とするための課題などについてご意見、ご提案などをいただくことを目的に、市民まちづくりフォーラムを開催いたしました。

フォーラムの開催は今年度で4回目となります。より多くの市民の皆様に参加していただくため、無作為に抽出した3,000名の市民の方々に参加依頼状を送付し、ご承諾いただいた方々に参加していただく方法を採用いたしました。今回は67名の方々にご承諾いただき、当日は49名の方々に参加していただきました。



仙台市の計画体系



平成27年度市民まちづくりフォーラムについて

仙台市の重要プロジェクトの現状を「評価」していただき、今後、より良い施策とするために課題などについてご意見・ご提案などをいただくことを目的として、グループワーク形式で開催

◆フォーラムの流れ

施策説明

各施策を担当する職員が施策の取り組み状況をご説明します。



専門家からのアドバイス

各施策の専門家から論点や問題点を提起していただきます。



テーブルトーク

施策の評価や今後の展開についてファシリテーターの進行で参加者の皆様同士で話し合います。



発表会

話し合った結果を他のテーマ参加者と共有してもらうため、発表会を行います。

タイムスケジュール

12:30~	受付
13:00	開会
13:00~13:10	10分 オリエンテーション
13:10~13:25	15分 ・グループワーク施策説明 ・専門家からのアドバイス
13:25~15:25	120分 ・テーブルトーク
15:30~16:50	80分 発表会
16:50	閉会



テーマ1 「防災環境都市」づくり

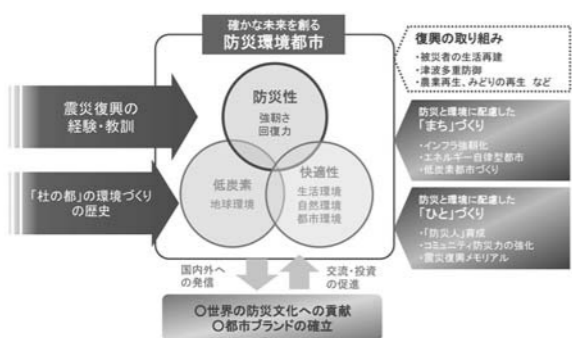
主な説明内容

震災の教訓を踏まえて、世界の防災文化向上への貢献、記憶と記録を次世代へ伝えるメモリアル関連施策など、防災と環境に配慮した「防災環境都市」づくりを目指した取り組みについて説明しました。



「防災環境都市」づくり

防災と環境を基軸とした未来を創るまちづくり



■背景 なぜ今「防災環境都市」なのか？

○東日本大震災の経験

- ・災害は都市全体への巨大なリスク
- ・経験、教訓の継承が必要

○「杜の都」のまちづくりの歴史

- ・戦災復興、健康都市、低炭素都市づくり
- ・市民とともに課題に挑戦、良好な環境の保全・創造

○「防災」「環境」は世界共通の課題

- ・世界の関心：震災の経験と知見
- ・世界が注目：国連防災世界会議の開催「仙台防災枠組」を採択

⇒「復興後」の将来を見据えたまちづくりが必要です。



テーブルトークの結果

◆自立について

災害時、「自立」に必要な電気やガス、食料などエネルギーをどう確保していくか、誰が主体となって確保していくかが課題になると思います。また、最も重要な「情報」については、地震や水害などのタイプによって、避難対象エリアなど、必要となる情報が異なることから、正確で詳細な情報をどのようにして発信していくのが大きな課題です。他にも、避難所運営において誰がリーダーシップをとってやっていくのか、町内会に参加していない人たちにはどのように周知を図っていくのかなど、「自立」を実現するには問題が多いのが現状。そもそも、情報を流しても関心のない人は行動を起こしません。これらは個人や自治会だけではどうにもならないため、行政と協力して進めていく必要があります。

◆市民の防災意識について

防災に関する行政の取り組みや「自立」に対する意識について、市民アンケートなどを通じて知ることが、防災人・防災組織づくりには重要だという意見がありました。また、東日本大震災のような大災害でも、時間の経過とともに人の意識は風化してしまうことから、映像や震災遺構を残すことで、次の世代に伝えるべきとの意見もありました。そしてもう一つ、災害時のために大切なのは、有事の際に動ける人材の確保です。個人情報の問題はありますが、地域に住んでいる元医者など、専門的知識を持っている人を予め把握し、コーディネートしていくことが、今後必要になってくるのではないのでしょうか。

参加者からの主なご意見

- 対応、取り組みにスピードを加えて今後対応してほしい。具体的にいつまでに何を決定し行動するのか。
- 観点がいろいろあり話し合いは興味深かったが、まとめるのが難しかった。
- ぜひ情報を活用しやすく伝えて頂きたいと思った。

専門家から



東北工業大学工学部建築学科
教授

渡邊 浩文氏

電気等々のエネルギー、水、食料に加え、「情報」が指摘されたのは良かった。平成27年9月の集中豪雨の折に、夜中に30分毎に情報が携帯電話等に流れたが、危惧の程度や地理的精度など不十分であったことを背景としている。また発災時の共助について、それをコーディネートする人材も必要なのではないかということも話題となった。論点を踏まえて課題抽出ができたのが本フォーラムの大きな成果だったと思う。

ファシリテーターから



一般社団法人こはく
代表理事

岩井 秀樹氏

防災環境都市づくりという広い領域のテーマだったが、「防災を自分事」と捉え参加された方が多かったと感じた。特に直近に発生した水害の経験から、「広域情報ではなく、住民一人ひとりの居住地域に応じた適切な情報がないと行動が起こせない」「地震と水害では備えや避難行動も違う」といった意見や「大規模避難所運営のためには地域内の協力体制が不可欠」など具体的な意見交換が行われた。防災だけでなく環境・生活の融合が求められる時代だとすると、更なる住民参加型の都市づくりの必要性を感じた。

テーマ担当職員から

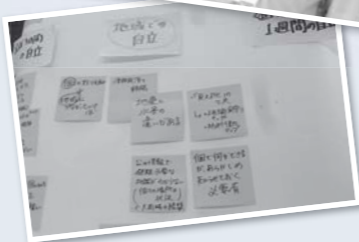
「防災と環境に配慮したまちづくり」という考え方には概ね賛成していただきましたが、参加された方の立場や住居形態などによって、様々な関心やご意見があることを改めて認識いたしました。具体的には、情報を発信する行政と受け取る市民の在り方、地域防災リーダーの責任範囲、マンションの防災などについて活発に議論いただきました。今後の取り組みに対する具体性・スピード感が見えないというご指摘についても、今後の事業推進の参考にしていきたいと思います。

専門家からのアドバイス

東日本大震災の後、仙台市では様々な防災・環境の施策を展開しているが、やや総花的で「できることをできる範囲で」という域を超えていない。非常事態を体験した仙台市民であるからこそ、あのような時に何がどれくらい必要であったのか、取り組む要素・項目だけでなく、その量と質の議論ができると思う。

シビア・アクシデントは防ぎきれないことを前提に、「防」災の視点とともに長期化する被害を減らし短くする「減」災と「自立」の視点から、発災後に仙台市民が如何に災害に立ち向かったのかを市民の視点で議論し整理することは、災害の記憶を超え災害対応の知恵を伝承することにつながる。

そこで市民まちづくりフォーラムでは、「災害時のエネルギー自立って...何?」、「防災環境『ひと(人)』って...何?」の2つの論点に対して、「自立」をキーワードに議論を深めていただきたい。



テーマ2 防災集団移転跡地の利活用

主な説明内容

甚大な津波被害を受けた荒浜などの東部地域において、防災集団移転の跡地の利活用を進めるため、現状や津波の再来への備え、周辺の状況や土地利用上の法規制の概要について説明しました。



津波防災対策の基本的な考え方

多重防御 防潮堤再整備、防災林再生、県道かさ上げなどによる「多重防御」による減災

避難 「逃げる」ことを重視し、避難の丘や避難施設、避難道路などを整備

移転 安全な内陸への集団移転による「総合的な防災対策」

【断面図】 最大クラスの津波の防御

市街地、仙台東部道路、避難施設、県道、塩釜互換線、公園(丘)、海岸防災林、海岸防潮堤、避難道路、県道かさ上げ、避難の丘、真山運河、災害危険区域

数十年～百数十年に一度の津波の防御

内陸への移転

【荒浜地区位置図】

荒浜小学校 震災遺構として保存

地域モニュメント

住宅基礎 震災遺構として住宅基礎の一部を保存

専門家からのアドバイス

論点は二つである。

一つ目は、これからの荒浜はどうあるべきか、という基本的方向性を考えることである。そのためには、昔、荒浜はどのようなまちだったのか、津波は荒浜にどのような影響を与えたのか、今、何が残り、どのような動きが見られるのか、将来的にどのようなポテンシャルがあるのだろうかなど、荒浜やその周辺の過去・現在の状況を踏まえつつ未来を考える必要がある。

二つ目は、どのように計画を考えていくべきか、計画手続きを進めていくべきか、という点である。計画を考え、決めていく際に、住民は、市は、市民は、荒浜に関心のある人は、どのような役割を果たしつつ計画を決めていくべきなのだろうか。



テーブルトークの結果

◆荒浜地区について

甚大な被害を受けた荒浜地区の全ての居住者は、より安全な西側地域へ移転しています。土地を活用するにはまずその方々の想いを汲む必要がありますが、荒浜に居住していた方々からは「若い人にも集ってもらえるような場所にしてほしい」という声が増えているとのこと。荒浜地区の北には東北で唯一の国際拠点港湾仙台塩釜港や、仙台うみの杜水族館などが位置しており、「市内外を問わず、様々な年代の方々が荒浜を訪れる可能性がある」「海沿いの地理や地域の特色を生かした土地利用ができないか」などの意見を出し合いました。

◆荒浜地区の具体的な活用方法

海を活用する一例として、湘南で行われているビーチバレーのように、ビーチスポーツの東北大会などを行ってみてはどうかというアイデアが出ました。また緑を増やすための植樹を行ったり、健康のためにパークゴルフ場を整備したり、津波への不安を軽減するため丘を整備し、いざというときの避難場所にするなど、様々な意見が出ました。

◆計画の主体について

問題は、一体誰がそれを計画・実行するかです。国や県、市、その他の民間事業者などが考えられますが、どこが適当なのか、答えは出ていません。市民、企業、国、県、市とそれぞれ考えていることがあると思うので、そのアイデアを持ち寄り、情報を共有し、それぞれが協力して成し遂げていくことが望ましいのではないかと思います。

参加者からの主なご意見

- 今回の話し合いのようなことを一度だけにしないで何回か行えばもっと具体的な意見も出てくるのではないかと。防災集団移転跡地の利活用という問題はとても重要な問題のうちの一つだと思う。
- 津波により被災した移転跡地の復興が、本当の意味で復興完了となるのではないかと。

専門家から



東北大学大学院工学研究科
都市・建築学専攻准教授
姥浦 道生氏

荒浜の元住民の方のことを思いつつ、また周辺の状況や将来の予測などを踏まえた、大変素晴らしいご意見・ご提案がたくさん出た。また、元住民の方々を中心に、様々な人たちが集まって方針や具体的方策を検討すべき、という意見も出された。まさにその通りだと思う。今回の結果が、荒浜での話し合いの場の形成に、そして新しい荒浜の創出につながっていくことを願っている。

ファシリテーターから



コミュニティ・ワークス
代表
青木 ユカリ氏

参加者それぞれに荒浜を思い、また現地に住んでおられた住民の声にも耳を傾け、この地がどのように活かされることが良いのか。短い時間ではあったが、こうした場や機会の有効性を感じられた参加者の反応を嬉しく思う。

テーマ担当職員から

被災地と関わりがあった方・なかった方、様々な立場の方々が参加されて「移転跡地をこれからの仙台、未来の人たちのために何か活用できないか」「仙台にしかできないことを考えよう」と活発な議論があり、行政側だけでは発想できないアイデアやご意見を多数いただくことができました。今回のフォーラムを踏まえて、行政だけでなく様々な立場の方々のご意見を幅広く受け止めていく必要があると改めて認識いたしました。

テーマ3 世界につながる交流都市づくり

主な説明内容

「市民の皆さんが愛着を持って世界に誇れる交流都市」を目指し、まちの魅力を活かした国外からの誘客及びコンベンションの誘致と、国際交流の取り組みについて説明しました。



専門家からのアドバイス

仙台市では平成27年3月に行われた第3回国連防災世界会議や平成28年5月には秋保地区にてG7仙台財務大臣・中央銀行総裁会議が開かれる予定があるなど、国外から多くの方が仙台を訪れる機会がますます増えていく。それに向けて仙台市でも外国人誘客プロモーションやコンベンションの誘致、Wi-Fiなどの受入環境整備をはじめ、国際交流・多文化共生の推進など各種取り組みを重ねている。ではそこに私たち仙台市民がどれくらい関わっているか、また今後関わることができるか?なぜいまこのようにインバウンド（訪日外国人観光客）誘致が話題になっているのか?そこを紐解きながら、今日は市民目線で「自分ごと」と仙台市が推進している「地域ごと」をクロスする部分を探り、「市民が愛着をもって世界に誇れる交流都市」を目指すうえで、必要なことは何かをみなさんと積極的に話し合っていきたい。



テーブルトークの結果

◆仙台の観光イメージについて

象徴的なものは「青葉城」ですが、「外国の友人を連れて行くならどこか」という問いには「芋煮会」や「ポケモンセンター」、「コボスタ」、「酒造見学」などの意見が出ました。そこから分かるのは、行政が発信する観光地と市民が発信する「アイメッセージ」にはズレがあるということ。仙台の魅力はそこにあり、外国人観光客もそれを求めているのではないかという意見もありました。

◆仙台観光の可能性について

仙台では何ができるだろうかと考えたとき、海の幸をもっとアピールしたり、外国の学生さん向けに食事付きの寮を作ったり、外国の文化を知っておくなど様々な意見が出ました。中でも特に大事なものは「おもてなしの心」。また自分の特技や魅力を見つめ直し、「人材バンク」として登録することで、ボランティアに興味がある市民の受け皿を作る、という面白い意見もありました。

◆市民レベルの「おもてなし」について

私たち迎える側が、言葉が分からないからといって逃げるのではなく、フレンドリーに受け入れることが大事だという話になりました。決してハードルの高いことではありません。片言でもいいから何とか伝えようという気持ちを、市民全員が持つことが大事。30年後には、仙台が外国人にとって一番来たい街になればいいなと思っています。

参加者からの主なご意見

- 外国人が多く来日している現在、どうして東北地方は来ないのか。オーストラリアの方がパウダー雪を喜んでくる北海道。東北だって諸々あると思うのですが。
- 外国人観光客や仙台に引っ越してきた人の意見を分析するとよいのでは。

専門家から



株式会社創童舎
ソーシャルワークス局
観光プロデューサー
東北インバウンド
推進チームリーダー

後藤 光正氏

ずっと仙台に住んでいる方、引っ越してきた方、一度仙台を離れて戻ってきた方と多様な参加者で意見を出し合った。各自暮らしてきた背景が違って「市民として自分たちが住んでいる仙台の魅力をもっとアピールする手伝いをしていきたい」という共通した想いと積極性を感じられる場であった。

今後はその市民意欲を活かし、さらに在仙外国人を交え行政と市民が一体となる交流都市作りを進めるプラットフォームづくりに期待したい。

ファシリテーターから



株式会社ライブブリッジ
代表取締役

櫻井 亮太郎氏

難しいテーマにも関わらず、とても活発な意見が交わされ、仙台市の国際化に対する興味と期待が感じられた。他地域から仙台に引っ越してきた参加者も多く今話題のインバウンドの話だけではなく、法人税の減税による大企業の誘致など様々なアイデア、そして課題がでた。特におもてなしの心、おもいやりなど、ソフト面の改善が真の国際都市になるには必要なのではという意見が心に残った。素晴らしい取り組みであり、今後も続けてほしい。

テーマ担当職員から

今回のフォーラムを通じて、すべての参加者の皆さんが仙台に誇りと愛着を持っており、自分の住むまちのことを外国人にもっと知ってほしい、そのために何かをしたいとの思いを強く感じ、行政として背中を押されるような、大変心強い思いがしました。こうした市民の皆さんの思いを最大限に受け止めながら、まち全体としてのおもてなし力を高めていけるよう、今回の機会を今後の施策展開に活かしてまいりたいと思います。

テーマ4 「子育て応援社会」の実現

主な説明内容

人口減少社会に対応し、活力ある仙台を維持するために、出産や子育ての希望を叶える「子育て応援社会」の実現に向け、仙台市の子どもと子育て家庭を取り巻く現状や、平成27年3月に策定した「仙台市すこやか子育てプラン2015」の施策などについて説明しました。



2. 仙台市すこやか子育てプラン2015について

本市における幼児期の教育・保育や地域における子育て支援を中心に、子どもの育ちと子育て支援の総合的な計画である、「仙台市すこやか子育てプラン2015」を平成27年3月に策定しました。

基本理念	基本目標	施策体系
未来を担う子どもを元気に育て、安心して子育てができる社会を実現する。	【基本目標1】子どもが明るく元気に育つ環境	(1) 子どものすこやかな成長を守るまちづくりの推進 (2) 子どもの多様な体験の場の充実 (3) 生きる力をはぐくむ教育の充実 (4) 子どもの活動拠点の整備と充実 (5) 社会的自立への支援 (6) 支援を要する子どもへの対応
	【基本目標2】安心して子育てができる社会	(1) 子どもがすこやかに生まれ育つための保健・医療の充実 (2) 教育・保育施設の整備と保育サービス等の充実 (3) 幼児期の教育・保育の質の確保のための取組 (4) 仕事と子育ての両立に向けた取組 (5) 家庭の子育て力向上のための取組 (6) 子育て家庭に対する支援の充実
	【基本目標3】子どもと子育て家庭を応援する地域	(1) 地域の子育て支援力の充実 (2) 地域における子育て支援施設等の充実



専門家からのアドバイス

子育てを「量」と「質」の両面から社会全体で支えるべく、平成24年に子ども・子育て関連3法が成立した。今年度はその「子ども・子育て支援新制度」の本格施行初年度である。実施主体は各市町村であることから、仙台市でも様々な施策に取り組んでいるところである。私自身も「仙台市子ども・子育て会議」「仙台市社会福祉審議会児童福祉専門分科会」の委員として、仙台市の取り組みについて審議してきた。

この新制度の主なポイントの一つが「地域の実情に応じた子育て支援の充実」である。しかし、これまでの仙台市の取り組みは、市民一人ひとりの様々なニーズに対してどの程度応えられているだろうか。また、「子育て応援社会」の実現のために、市民一人ひとりができることとしてどのようなことがあるだろうか。

本日のフォーラムにおいて、参加者の方々から様々な意見を出していただいて課題を見出し、それらに対する解決策を考え、市に対して建設的な意見を提言する場としたい。



テーブルトークの結果

◆保育所について

「仙台市では前年の11月に申し込みをしないと保育所には入れない」と聞き、仙台は子育てしづらい場所なんだと思ったことがありました。待機児童の問題もあるため、廃校になった小学校や幼稚園を保育園にリフォームできないかという意見がありました。

◆子育てに関する啓発について

子育てに対する理解を深めるため、啓発活動が必要です。ポスターなどを制作し、駅やバス停、企業などに貼ってもらい、子育てをしている人に対する協力を呼びかけたいという意見がありました。

◆経済的支援について

子ども一人あたりにかかる養育費はおよそ1,000万円。経済的な負担は大きく、その支援策として、例えば敬老乗車証の子育て版のようなものがあればいいという話になりました。

◆地域との関わりについて

繰り返される遊具事故の影響で遊具が撤去されている公園が多く、なかなか公園で遊べないという現状があります。遊具の設置については町内会とも話し合う必要があるため、地域の方々が集まるサロンやお茶会があるといいと思います。

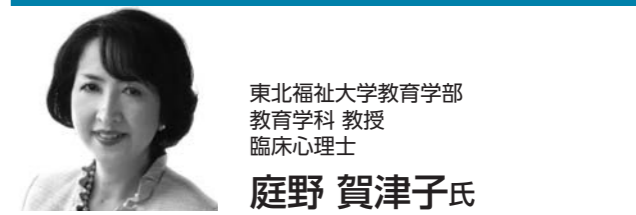
◆メンタル面でのサポートについて

子ども間のトラブル、仕事との両立、周囲との付き合いなど、子育てにストレスはつきものです。そのため、気軽に相談できるカウンセラーや施設の情報を、母親教室や健診の際にチラシやポスターで周知してほしいという意見がありました。

参加者からの主なご意見

- 収入によって保育料が決まるのはどうかと思う。家のローンを抱えているなど、家庭の状況はそれぞれ異なるため、単純に収入で決められると大変。
- 公共交通機関、特にバスに乗るには勇気が必要。世の中全体が子育てについて理解してもらえるよう、ポスターを貼ったりマスコミを通じて「みんな子育てをしよう」という啓発活動が必要だ。
- オムツ用にごみ袋を配布されるが、量が足りない。特大サイズだと重くて持てなくなるので、小さい袋の数を増やしてほしい。

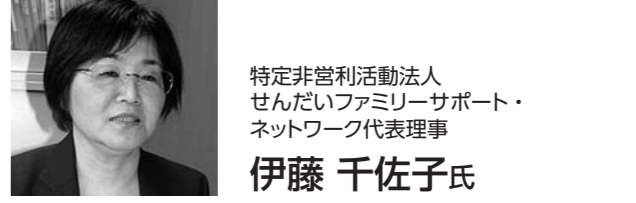
専門家から



庭野 賀津子氏
東北福祉大学教育学部 教育学科 教授 臨床心理士

参加者の方々には、現在子育て中のお母様方や、お孫さんがいらっしゃる方々で、全員がなんらかの形で子育てにかかわっていた。それぞれの参加者から、子育て(孫育て)をする中で気付いたことや市への要望などが積極的に出され、活発な議論の場となった。皆さんの意見を伺い、仙台市の取り組みにおいて、子育て中の方々の細かなニーズに応えきれていない部分が多いことを知った。今後も様々な形で市民の方々の声を聞き、施策に反映していくことの必要性を感じた。

ファシリテーターから



伊藤 千佐子氏
特定非営利活動法人 せんだいファミリーサポート・ネットワーク代表理事

3名の子育て真っ最中の母親を中心に、祖父世代が加わったのグループトークだった。公園から遊具が消えた、交通手段がないので家から出られない、「ママ友はともだちではない」というように、母親同士の関係性の希薄化、子育てにはお金がかかるという母親たちからは、自分たちの声をどこに届けたらいいのかといった声もあり、子育てしやすいまちへの啓発活動の必要性、行政の役割など、具体的な話につながった。

テーマ担当職員から

参加者の方からは、子育て中の方々が日常で大変と感じる場面を知ってもらうための啓発や、地域で様々な世代の方が参加できるサロンなどの場がほしいといった、ご自身の経験から普段感じられていることを伺うことができました。また、世代の異なる方々に参加いただいたことで、課題やニーズも変化していることを知ることができ、市民の方々の様々なニーズを伺いながら施策に反映していくことの重要性を改めて認識しました。

テーマ5 高齢者が社会の担い手として活躍する新しい仕組みづくり

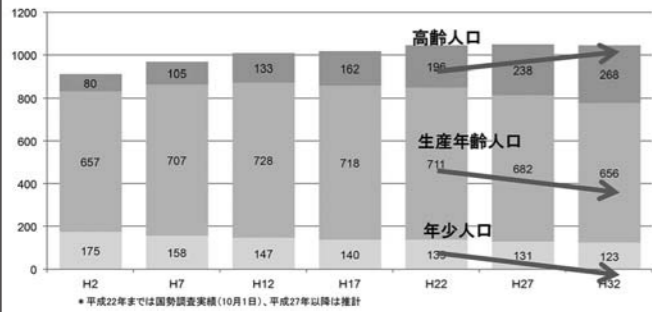
主な説明内容

少子高齢化が進み、働き手となる人たちが今後さらに減少することを踏まえ、元気な高齢者が、就労やボランティア活動などにより社会を支える担い手として活躍する新しい仕組みづくりを実現するため、高齢者の就労や社会貢献に対する現状などについて説明しました。



本市における高齢化の状況

・現在107万人ある本市の人口は、平成32年に105万人弱となると見込まれています。
・年齢階層別にみると、年少人口（～14歳）、生産年齢人口（15～64歳人口）は減少する一方で、高齢人口は大幅に増加する見込みです。
→ 本格的な少子高齢社会に対応するため、高齢者が「支えられる」だけでなく、社会を「支える」役割を担うことが重要です。



仙台市シルバー人材センターの活動

手作り作品製作
技能向上、後継者育成を目的に、市内公園等において定期的に各種講習会を行っている。

区民まつりや生きがい健康まつりに参加し、手作り作品を販売しながらセンター事業の普及啓発にも取り組む。

ネクタイフォームや着物リフォームや、着なくなった洋服等を材料にして、バッグや小物などのリメイク作品を製作。

手作り作品販売

植木剪定講習会の様子

専門家からのアドバイス

高齢者の就労と社会貢献に焦点を絞り、これら二つのテーマについて、社会状況の動向やその社会的意義、施策についての理解を得た上で、意見交換を行った。

高齢者の就労については、高齢者が働くことについての社会的理解がまだ十分には浸透していないとの認識を得た。また、社会貢献活動をめぐっては、高齢者が参加への初めの一歩を踏み出すための誘因となる施策の必要性などについて理解を共有した。

こうした当日の成果を、フォーラムに参加された皆様方においても、ぜひお一人おひとりの取り組みとして活かしていただくことができればと願っている。



テーブルトークの結果

◆高齢者の就労

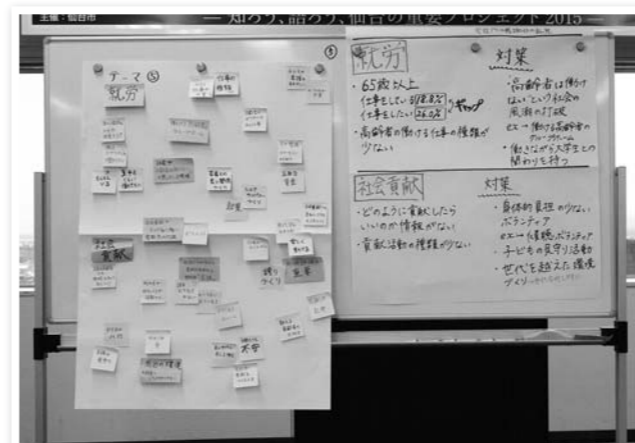
「仕事をしたいが仕事がない」という高齢者の就労希望を叶えるため、まず「高齢者は働けない」という風潮を打破する必要があります。高齢者の働き口は職種が限定され、男は警備、女は清掃というイメージが強いので、高齢者が働きやすい仕事や得意なことを活かせる仕事を増やしてほしいという意見がありました。

◆高齢者の社会貢献

参加者の中には、小学生への挨拶運動など地域における見守り活動をしている方がいらっしゃいました。高齢者だけではなく、大学生のボランティア活動を必須にするなど、世代を越えた関係づくりが必要だと思えます。また、どのように社会に貢献したらいいのか情報がないという意見もありました。身体的負担が少ない傾聴ボランティアを紹介したらよい、ボランティアでも少し対価を払ったほうがよい、社会貢献した高齢者に対して市から感謝状を贈ると喜ばれるなど、高齢者が参加したくなる社会貢献についてのアイデアが出されました。

参加者からの主なご意見

- このテーマのためか参加者は高齢者だったが今後の事を考慮すると若い人の意見をもっと聞くべきだと思う。



専門家から



東北学院大学経済学部
共生社会経済学科
教授

阿部 重樹氏

高齢者の就労と社会貢献という、どちらも参加者それぞれの具体的な生活実感と密接に結び付くテーマを扱うことになり、話し合いがどう積極的に展開されていくのかという一抹の不安もあった。しかし、実際には活発な意見交換が行われ、現状や課題や参加者各自が抱えている思いについて、理解の共有を豊かにすることができたことが何よりの収穫だったと思う。なお、「高齢者が…」というテーマのセッションであっても、異世代(若い世代)の参加者があった方が、議論の幅の広がりや内容の深化をより図れたのではないかという思いを強く持った。

ファシリテーターから



地域振興サポート会社
まよひが企画
代表

佐藤 恒平氏

社会を担う活動が褒められる環境づくりを目指し、行政への要望が「公益活動に尽力する団体・個人がもっと誇りをもてる手助けをしてほしい。」だった。サービスが欲しい、お金が必要といった要求ではなく、良い活動が報われる事こそが、未来の担い手を増やす最良の一手であると参加者の皆様と導きだせた事を誇りに思う。一億総活躍の社会とはきっと、一生懸命頑張る他人を認め合い感謝し、手を差し伸べ応援し合う社会なのだと感じた。

テーマ担当職員から

様々な人生経験をされてきた参加者の皆様からのご意見は参考になるものばかりでした。中でも、褒め合える環境づくり、感謝状の発行を増やすというご意見への賛同が多く、高齢者が社会の担い手として活躍するためには、世代を越えて、お互いを認め合い尊敬し合う環境づくりが大切なのだと感じました。いただいたご意見は、今後の取り組みの参考にしてまいりたいと思います。

テーマ6 文化・芸術によるまちづくり

主な説明内容

文化・芸術活動によってまちの魅力をつくりだすため、音楽・演劇・文学・アートなどの文化振興事業や、ミュージアム連携事業などの取り組みについて説明しました。



⑥ 文化・芸術によるまちづくり

文化振興事業 ～楽都仙台～
音楽の都「楽都仙台」として、国際音楽コンクールや音楽フェスティバルなど音楽文化の振興と音楽を介した魅力ある街づくりを推進しています。

- ▶ 仙台国際音楽コンクール
- ▶ 仙台クラシックフェスティバル
- ▶ 仙台フィルハーモニー管弦楽団・仙台ジュニアオーケストラ

～劇都仙台～
「演劇」の振興をはかり、市内の舞台芸術全体の向上を目指すため、演劇に関する様々なイベントやワークショップを「劇都仙台事業」として実施しています。

ミュージアム連携事業 (所管:教育局生涯学習課)

【概要】
●ミュージアムの発信力を高め、多面的な学びの機会を創出するため、仙台・宮城地域の多様なミュージアム施設との共同事業体である「仙台・宮城ミュージアムアライアンス(SMMA)」において、情報発信や連携事業に取り組みます。
※ SMMA参加館: 社会福祉法人共生福祉会福島美術館、仙台商みの杜水族館、スリーエム仙台市科学館、仙台市緑の森広場、仙台市天文台、仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)、仙台市博物館、仙台市八木山動物公園、仙台市歴史民俗資料館、仙台文学館、せんたいメディアテーク、東北学院大学博物館、東北大学総合学術博物館、東北福祉大学芹沢健介美術館、東北福祉大学、鉄道交流ステーション

【取組内容】
○ミュージアムをつなぐ
専門分野をこえた複数のミュージアムが共同で、楽しみながら発見・体験できるプログラムを実施します。
・ミュージアムユニバース、クロスイベントの実施
○ミュージアムをつたえる
ミュージアムの新しい魅力やかくれた面白さを発見してもらうためのミュージアムの多彩な情報を発信します。
・ポータルサイト「見験楽学 仙台・宮城ミュージアム事務局」の運営
・アプリ「ミュージアムに行こう」の運営
・フリーペーパー「旬の見験楽学便」、SMMAイベントスケジュールの発行
○ミュージアムをひろげる
図書館や学校、観光など地域のさまざまな資源と連携します。
・ブックキャラバン等の実施

専門家からのアドバイス

文化政策を「まちづくり」につなげていくには、美術館や劇場に集まる愛好家だけを対象にしては駄目だ。芸術を産業や教育とマッチングし、地域の活性化や課題解決につなげていく「創造都市」は、世界的なトレンドであり、国内でも「越後妻有アートトリエンナーレ」や「瀬戸内国際芸術祭」など巨大な成功事例が生まれている。仙台には素晴らしい交響楽団やフェスティバルがある。クラシックからジャズまで幅広い音楽ファンに愛される「楽都仙台」は、仙台で暮らす魅力になっているが、音楽に比べやや印象薄な美術、工芸、文芸、映画などの他ジャンルでも、政令指定都市にふさわしい取り組みを期待したいところだ。「定禅寺ジャズフェスティバル」のような市民参加型のプログラムを、アートや伝統工芸でも展開し、市民力を活かしていけば、「楽都仙台」の次のステージとしての「創造都市・仙台」の可能性が見えてくるだろう。



テーブルトークの結果

◆体験を通して文化をより身近なものにする

文化・芸術を仙台人の生活につなげていくことを前提に、文化の新しい魅力を発見し、体験を通してより身近なものに感じてもらうことが必要ではないかという意見がありました。「楽都仙台」を象徴するジャズフェスや仙台クラシックフェスティバル、伝統的な「仙台七夕」などを新しいアートと結びつけて発信していくことで、仙台人が誇りに思える文化芸術を創り出せるのだと思います。

◆情報発信と文化施設の充実

無関心な人を含め、様々な人に興味を持ってもらえるようなクリエイティブな情報発信の仕方を考える必要があります。また、文化施設をもっと開放し、参加・体験型のシステムを作ってみてはどうか、スケートリンクを作って総合芸術として世界に仙台をアピールしてはどうか、2,000人級のオペラホールの設置が必要ではないか、などの意見がありました。

◆仙台の新しい伝統工芸品

外国の文化を伝える施設があってもいいと思うし、逆に仙台の伝統を、外国人の目線や評価を取り入れてリ・デザインしてみてもどうでしょうか。仙台の伝統工芸品を外に発信していけるようなシステムづくりの例として、仙台市による「独自文化に対する認定プロジェクト」の中で新しい工芸品を含めて認定し、発信することが挙げられます。

参加者からの主なご意見

- 市民が体験できるようなイベントが少ない。もしくは告知力が足りない。PRの仕方に問題があるかも。
- 生まれたときから仙台にいたがいつのまにかジャズフェス、せんくらなどイベントが増えていると感じた。それは仙台市の取り組みがあったからだと気付いた。
- 子ども、大人、専門家、素人全ての市民層がそれぞれに楽しめるワクワクするイベントが開催されていることは誇りでもあり評価に値する。

専門家から



東北芸術工科大学
大学院准教授
大学院デザイン工学専攻長
宮本 武典氏

仙台の文化芸術環境の現状について、参加者はおおむね満足しているようだったが「次世代のために、さらに良くするにはどうすべきか」について語り合っていると、「音楽に偏り過ぎている」「関心がある人・ない人がはっきり分かれてきている」「公演情報にアクセスしにくい。もっと広報に工夫を」「気軽にアートに触れられる場所が街中にほしい」などの率直な意見が出た。課題がいったん共有されると具体的な施策アイデアが次々に出てきた。愛好家ではなく生活者の視点に立った、実のある対話と施策提案ができたと思う。

ファシリテーターから



DAHA Planning Work
代表取締役
arts initiative ENVISI 代表
吉川 由美氏

仙台暮らしが長い方も、移り住んで間もない方も、仙台は暮らしやすいと感じ、「せんくら」やジャズフェスなどを心から楽しんでいることが改めてわかった。一方、文化政策がクラシック音楽に偏っている傾向や、文化施設の敷居の高さ、そして最新のアートに触れる機会の少なさを感じていることも共有できた。将来の仙台を担う次世代のためにも、市民が主体的・日常的に、今を生きる等身大の視座でのクリエイティブな体験に出会える場を積極的に創り出せるような文化政策が必要だと感じた。

テーマ担当職員から

仙台市で実施している文化・芸術事業やイベントについて、取り組みを知らないという方も多く、PRの方法や内容など工夫していく必要があると感じました。また、今後の取り組みとして、街中でアートを体験できるような場所や文化施設をよりオープンにしていくなど、日常的にアートに触れられる街への期待といった率直なご意見を、今後の文化行政の推進に活かしてまいりたいと思います。

テーマ7 駅×駅→東西線開業による新たなつながり創出

主な説明内容

仙台の新しい都市軸として、平成27年12月に開業する東西線。沿線には、集客施設や大学・高校、歴史・文化、自然、商店街やビジネスエリアなど、様々な資源があります。東西線の概要や沿線の取り組みについて説明しました。



地下鉄東西線の概要

地下鉄東西線 12月6日開業予定

仙台市太白区の八木山動物公園駅から、仙台市中心部を通って、仙台市若林区の荒井駅に至る路線。

仙台駅からの所要時間は八木山動物公園駅までは12分、荒井駅までは14分と今までより移動時間が大幅に短縮される。

路線データ
 路線距離：13.9km
 軌間：1435mm
 駅数：13駅（起終点駅含む）
 複線区間：全線
 電化区間：全線
 （直流1500V・架空電車線方式）
 地上区間：広瀬川橋梁、竜の口橋梁区間
 車両編成：4両

東西線の開業に向けた課題

利便性の向上

地下鉄東西線 = + 暮らしを彩る楽しさをつなぐ乗り物

「東西線に乗って、楽しみが増えた！」という市民の皆様の実感につなげたい！

東西線沿線の魅力発信とまちづくりが重要！！

専門家からのアドバイス

新たな地下鉄は都市にインパクトを与える。人口増加の最中 1987 年に開業した地下鉄南北線は、沿線での公共施設や商業施設、住宅団地の整備を誘導した。一方、東西線は人口減少に転じる目前で開業する。市街地が一定程度成熟しており、新たな市街地整備は荒井駅周辺で見られるだけである。しかし、東西線沿線の特徴は、山→広瀬川→都心→卸町→田園を貫き、個性ある地域をつないでいる。既に、動物公園や水族館、コボスタなどの集客施設が立地し、大学キャンパスも含めれば、多くの人が往来する可能性がある。東西線により、市民や観光客の往来・交流をいかに促すかが重要なポイントとなる。

今日は、生活者の目線から、東西線開業をきっかけに、盛り上げたい、盛り上がってほしい沿線地域を選び、新たな魅力や交流を促すための具体的なアイデアをどんどん出し合ってほしい。



テーブルトークの結果

◆地下鉄東西線への期待について

東西線沿線から4つのエリアを取り上げて話し合った結果、「利便性」「食の充実」「交通網の見直し」が主なテーマとして挙げられました。駅自体が楽しく便利なものとして、また地域を愛し、楽しく生活できる場所であってほしいということ、駅内外の飲食店を充実させたり、特産物を生かしたイベントを行ったりすること、環状型バス路線の検討など、様々な意見が出されました。

◆市と住民に求められる姿勢

「便利で楽しい駅テナントの誘致」「駅周辺の交通整備」「東部地区への観光施設（七夕センターなど）の設置」など、市民が行政に求めることはたくさんあります。一方で市民側としては、「これは自分たちの駅なんだ」という意識を持ち、まずは地下鉄を利用して、イベントや周辺マップ作成など東西線開業を契機に様々な形でまちづくりに参加していくことが大切だと思います。

◆東部地区の利用促進について

特に東部に対する懸念が多いのが特徴でした。「卸町・六丁の目」エリアは産業に携わる人が多く、利用者が限定されるのではないかと懸念に対し、卸町にある10-BOXを活用して、学生の利用も増やせるのではないかと意見や、農地が広がる東部地区ならではの「食」のイベントは行えないかといった提案もあり、東西線開業を契機とした新たなまちづくりのアイデアができました。

参加者からの主なご意見

- 駅を便利で楽しいテナントの入った場所にすれば、自ずと人が集まってくると思う。また、渋滞等が起らないように、駅周りの交通整備も大切。
- 駅の中にカフェ、スーパー、保育園が入っていると便利で嬉しい。
- 「自分たちの駅」という意識が芽生えるように、地域の町内会との連携を取ると良いと思う。
- 地下鉄ができることでバス路線が再編されるが、不便になる人が出ないことが大切。また、地下鉄ができて、仙台市は環状線の交通網が弱いので、強化の必要性があるのでは。

専門家から



特定非営利活動法人
都市デザインワークス
代表理事

榊原 進氏

今回は、大学生、主婦、シニアの5名の方が参加した。沿線に住んでいない方でも、東西線への期待が高い印象を受けた。和やかな雰囲気の中、様々な意見・提案がどんどん出て、時間が短く感じた。議論を通じて、「駅」を便利に楽しくすること、沿線地域に既にある資源を戦略的に生かすことへの想いを垣間見る事ができた。東西線開業をきっかけに、今回のような熱い議論や活発な活動が各地で生まれる事を期待したい。

ファシリテーターから



Sanca Process Design
代表

依田 真美氏

参加者の皆さんが必ずしも沿線在住であった訳ではないが、財政状況から活用まで、自分ごととして東西線のことを考えている姿勢を言葉の端々に感じた。「駅が便利で楽しい場所になること」や「食」の活用・強化など、「日常」を豊かにするためのアイデアが沢山だった。終了時間後も新たなアイデアが次々と生まれ、話を終わらせるのがもったいないようだった。開業後も引き続き市民の声を聞く機会を持てればと思う。

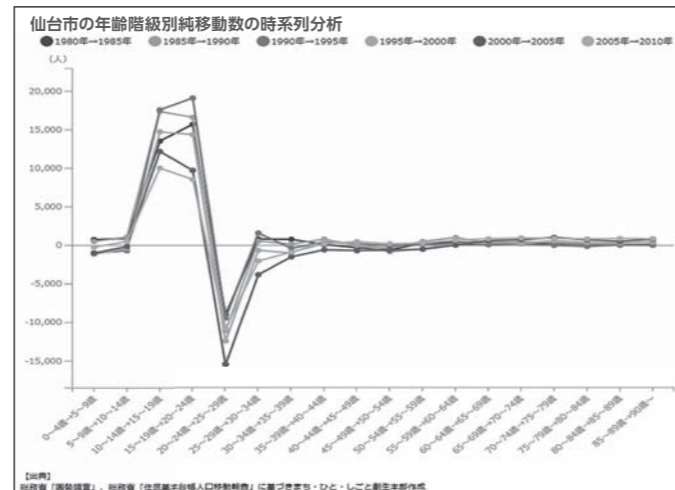
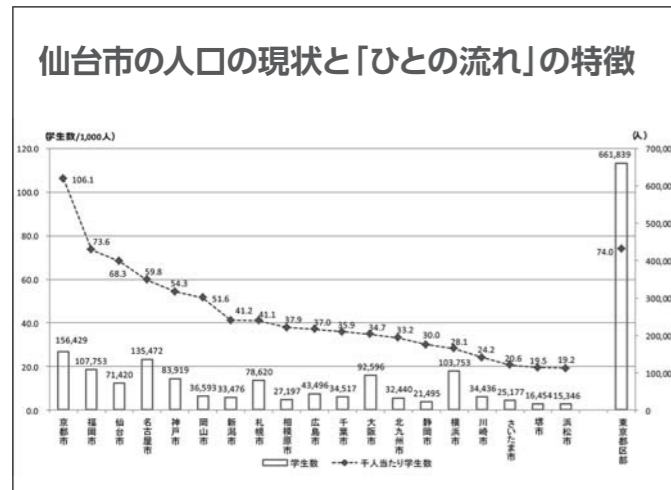
テーマ担当職員から

「便利」「食」「交通網」の大きく3つの観点から、大変前向きで活発な議論を展開していただき、参加者の東西線に対する期待や意識の高さをひしひしと感じました。東西線によって生活がより便利で豊かになってほしい、そのためにできることは何かというアイデアをたくさんいただきましたので、今後の取り組みの参考とし、これからも市民の方々と一緒に連携していきたいと思っております。

テーマ8 仙台に住もう！仙台で働こう！仙台への新しい人の流れづくり

主な説明内容

仙台に住みたい人・仙台で働きたい人の希望を実現し、移住や定住を促進することによって、仙台を活性化させる取り組みについて話し合うため、仙台は若い世代の大規模な転入転出が特徴であることや、転出抑制・移住促進の取り組みについて説明しました。



専門家からのアドバイス

首都圏をはじめ他県から見た仙台のイメージは、ありきたりだが「杜の都」「学都仙台」という言葉に代表される。100万都市であるが郊外だけではなく中心部にも緑が多い。学校、学生（特に大学生）が多い。東北を代表する大都市。反面、産業についてのイメージが薄く、第3次産業への従事者が9割弱を占めているにも関わらず、「米どころ」「食べ物が美味しい」など、第1次産業のイメージが強く、「仙台」＝「宮城県」というように、仙台市としての産業面や生活環境面での特徴や取り組みに対しての印象が薄いのが、他県から見た仙台市へのイメージと捉えている。震災の影響で、復旧復興への注力が最優先課題であったものの、人口流出や他県（特に東北地域以外）からの移住定住を促進するためには、他自治体のように広く浅くだけではなく、何か一項目・分野に絞って特化する事も、対象となる方々に対し、他地域と比べて圧倒的な魅力ある市となるのではないかと思います。上記の仙台市へのイメージとして強い項目、弱い項目、ギャップがある項目に、実は人口流出を防ぎ、移住定住の促進による人口増加を図るヒントがあると考える。



テーブルトークの結果

◆若者の流出を抑制する

仙台では、他県から来た大学生たちが卒業と同時に市外に就職するという流れが続いてきました。仙台は仕事がないと言われるかもしれませんが、一方で企業からは人が足りないと言われる。学生たちを引き止めるためには、まず企業と学生のマッチングを図り、仙台で働くという仕組みづくりを行っていく必要があるのではないかと思います。

◆働けるまちづくりについて

学生の中にはスーパーエリートもいれば就活で苦戦する人もいます。若者と企業のネットワークの場を作るといった取り組みを積極的に行い、誰でも働ける「やさしいまち仙台」をアピールしていくことが求められるのではないのでしょうか。転勤族に対しても「仙台だったら行ってもいいな、行ってみたいな」と思わせ、仙台へ呼び込んで定着を図ることが重要です。

◆「選ばれる仙台」について

「選ばれる仙台」を目指すにはまずPRしていく必要があります。テーマ3でも扱っていたような観光地・ランドマークの発信であったり、テーマ4で扱っていた子育て世代への訴求であったり、テーマ6で扱っていたイベントの露出方法であったり、今回のフォーラムの各テーマに関連する施策を前進・実現して、仙台の魅力発信していくことで、全国から人が集まる、仙台に留まる人口が増えていくのだと思います。

参加者からの主なご意見

- 問題が山積みのような感じが、浅く広く取り組むより一つ一つ着実に進めていくことが大事。一点集中で特化した取り組みをしてみたらよいのでは。
- 中学・高校で、社会や仕事についてのキャリア教育を行うことで、自分の進路や将来をイメージしてもらおう。

専門家から



みやぎ移住サポートセンター
運営責任者
清水 康史氏

仙台市出身者だけではなく、結婚や転勤など転入理由や在年数も様々な方々が参加されたため、在住歴が長い方は市の文化や環境への造詣の深さ、また在住歴の短い方は以前に居住していた他都市との比較など、主観ではなく客観的な視点からの意見が多く出され、課題だけではなく仙台ならではの良さも発見できた場となった。このような生の声の蓄積と分析が課題解決や前進の一步であると実感した。

ファシリテーターから



一般社団法人ワカツク
代表理事
東北学院大学 地域共生推進機構
特任准教授
渡辺 一馬氏

参加メンバーの多くが転勤や結婚などで仙台に住み始めた方々。まさに仙台という都市の実情を表すメンバーからは「仙台の都市機能には概ね満足」だが、「特徴がもう少しあればなお良い」といったところ。仙台の特徴づくりを、ベンチャー企業に力を入れることで尖らせるのか、それとも弱者を包み込むことでつくるのか等々、多様な意見が集まった。いずれにしても、特徴づくりは長期間必要なので、辛抱強く諦めずに取り組むべきだ。

テーマ担当職員から

20代後半の若者が大量に転出していく本市の人の流れの特徴を担当から説明させていただいた後、多様な経験をお持ちの皆様にご意見をいただきました。仙台に住んでもらう前提となる仕事づくり、求職者と仕事のマッチング、転勤であっても「仙台になら行ってみたい」と思わせるブランド力、それを支える生活環境の向上など、多岐にわたる論点を取り扱っていただきました。今回の議論を十分に踏まえて、今後の効果的な施策の検討に活かしていきたいと思っております。